

Giver

第18期生 周 辰安

「金や女，人間関係に直結しない事はやらなくなったよな，お前（笑）」

幼馴染に言われたこの言葉が妙に印象的だったし，実際に的を射ていた。私は高校時代にクラスで干され，「選ばれない辛さ」を知り尽くした。その反動で「金がある，ノリが良い，見た目が良い...etc.」そういった，「異性同性誰から見ても分かりやすく“需要がある”要素」にリソースを全振りし，そうじゃない要素や自分らしさは生産性が無いので全て捨ててきた。だからこそ，小野ゼミに入った後も就活やバイトをなるべく犠牲にしなかったし，人に頼った方が効率が良いと判断すれば，臆面もなく同期や先輩に頼った。受けた分の恩は，結果を出してから後で返せばいい。そう思っていた。

しかし，就活が終わっても，ゼミでは大した貢献は出来ず，恩を返すどころか，卒論の為に引き続き同期や先輩に頼り続けている醜い自分がいた。

論文執筆の段取りも分析も分からず，自分の力だけで進められる部分は殆ど無い。ひたすら人に頭を下げて，助けてもらうことしか出来なかった。これが生産性に魂を売り，資本主義の犬となった男の末路なのだろうか。それとも損得計算を間違え，目先の利益に拘りすぎた故に，中長期的な努力を怠った結果なのだろうか。卒論執筆で絶望的な状況に直面して，私は初めて自分の失った物の大きさに気付いた。

そんな私に対しても，小野先生や院生方，そして同期達はチャンスをくれたお陰で，私は今こうやって卒業エッセイを書いている。結果オーライといえそうだが，私は卒論執筆の際に感じた絶望と後悔をこの先の人生でも忘れないようにしたい。

アラサーで一番モテない男性は誰かに何も与えられず，人からブン取ることしか知らないハングリーぶった **taker** です。非モテの代名詞はチー牛ではありません。（伊藤ののこ，2021）

困った時に誰かが助けてくれるような年頃はもうそんなに長くない。社会人になる前に，ゼミ活動の中で「他人に何かを与えることができる人間になること」の大切さを学ぶことが出来て，私は本当に良かった。今後は人一倍の苦勞をしてでも良いから，「与えられる側」ではなく，「与える側」として生きていきたい。こんな私に対して，小野ゼミの門を開いて頂き，最後まで面倒を見てくれた小野先生，助けてくれた先輩方や同期達，何もしてないのに敬意を払ってくれた後輩達へ。

最後まで人に頼り続け，恩を返せなかった不甲斐ない私ですが，この教訓を活かし，今後は「与える側」として全力で生きていきます。また，チャンスがあれば，OBとしても小野ゼミに貢献させてください。

改めてですが，2年間，クソお世話になりました。